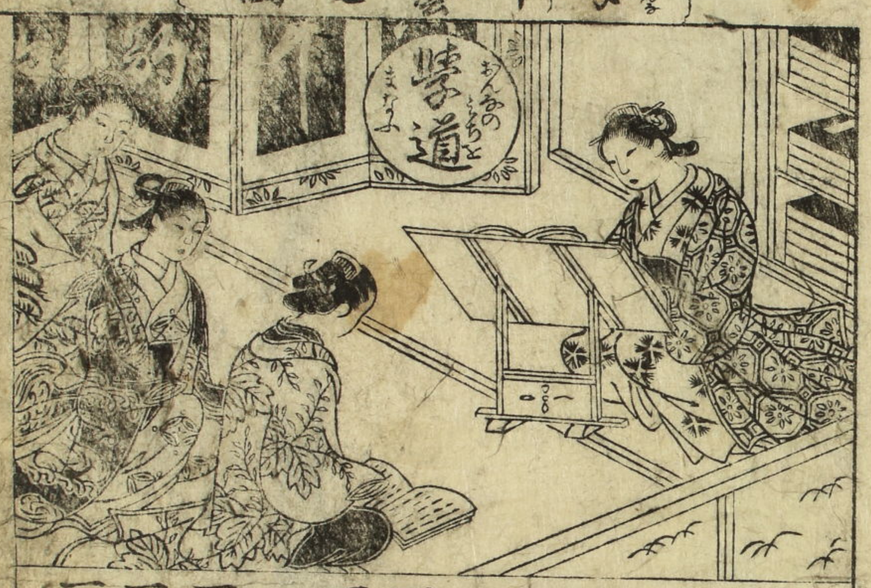
門 吐
1034
巻 1-3



女十藝之圖

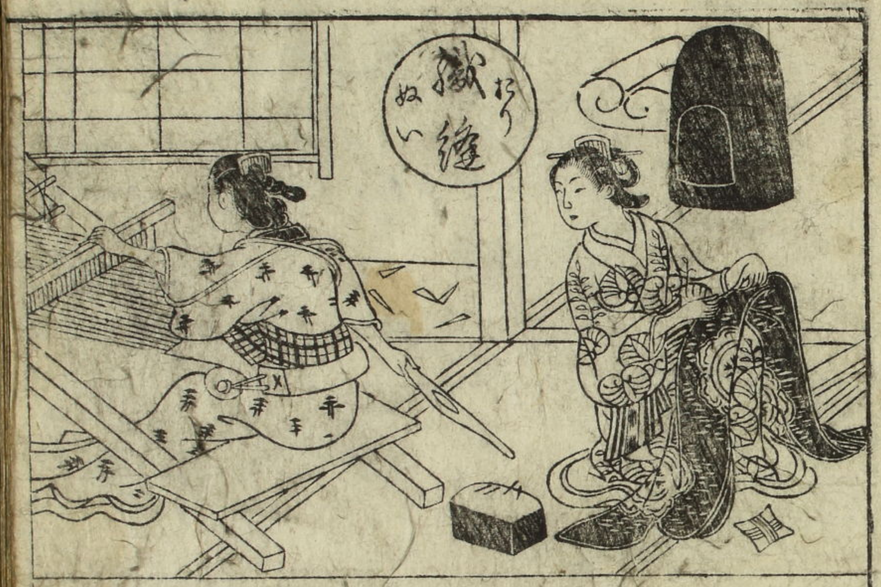
女訓繪物目錄
一 序
一 女十藝の巻
一 和哥二神像
一 八代集四季の和哥
一 六哥仙
一 源氏絵哥
一 その巻
一 女教訓經
一 婦人七去の事
一 女百人一首繪

序

女訓繪記集と云ふ文あり婦人定まる礼儀女の
たしなみ糸竹琴碁書画和哥俳諧茶の湯
お用ゐ多く世に行はれ民業ひの志
容姿百姫尾の四季の打ものとなる義
みりをかなとそうろう法のみよ女ごとなる
ふしぐをかしれ和のみよ女ごとなる
うろくの義うろうろぐ書ふうろうろ
絵かうろうろうろうろ女訓礼集繪詞と名付事こうび
ひろくまに夢浅書猪一田事氏そのうろうろ
きうろうろをあすねねかくいさかぬんでこのこ事そ
彩のきりくおかくてうろなる

浪華田千里誌

一 お言旬の事
一 同かざり付嶋
一 二の巻 婚礼の部
一 結納の事
一 同目録授ケ
一 吉日を撰ぶべき事
一 嫁ろれ次第の事
一 むこ入の事
一 婚礼当日の事
一 嫁入道具の事
一 嫁へこし入の事
一 婚礼終日の事



一 雑費引替ル事
一 色直しの事
一 婚礼の時いむ事禁の事
一 日をうつむる事
一 附 天赦日の事
一 男女お性の事
一 御厨子黒棚膳の事
一 黒塗衣裳の御台
一 衣桁膳の事
一 むこ入あとの小袖
一 暮のそうじ

一結納取かわし
　并ニ取置之事
一祝儀ニ而之事
一三ケ日振舞之事
一六ケ日済之事
一婚礼ニ而之事
一もち祝之事
一膝栗毛の事
一婚礼の取持之事
一三の事　嬪姐の部
一嬪姐ゟ嬪姐へあてる状
　認る事

一悪阻のす事　并ニ腰すゑ
一嬪姐ゟ六ケ月帯をする
　六ケ月の事をいふ　帯とゐす
　同帯をする吉日ゑらむ
一嬪姐十月の事
一嬪姐ゟ結納ニ而
　并ニ取置書ゑらむ
一嬪姐ゟ出産の事
一嬪姐ゟ産湯ニ而
　用る湯
一胎衣下る事のす
一児枕元の事
一額撫をゑらむ
一胎毒ゑらむ
　并ニ灸の事

一同食初の事
一乳母を定むる事
一初生の子髪を剃る事
一生土神を祝ふ事
一臍の緒の事
一髪を置く事
一男子と女子との
一髪置を祝ふ計りにて
一也の事

一勝手をはぐる事
一湯上の寸法の事
一押揃寸法并十二男の事
一産の時句ひよる方の事
一忌き衣裳の事
一招衣おさむる角
并吉日の事
一産衣の事
一宮参の事
并七夜の名を付る事
一生子へ乳を与る事
一産後書生せし事

一 琴の巻
一 囲碁の巻
一 六の巻
一 詰碁将棋の部
一 手習の事
一 文段章の事
一 料紙の事
一 文書ぐ事
一 招付の事

一 四季文章の事
一 祝儀文章の事
一 短冊色紙すき方
一 回文和歌の事
一 和歌を学ぶ事
七の巻
一 琴かるたの事
一 貝おほひの事
一 回貝梅の事
一 業位の事
一 業名号の事
一 墓参の事

一 高屋嘗のう
一 十楼高のう
一 高れ紀出やうれう
一 高屋の塔
一 法高根急方
一 深和のう
一 呉被載やうれう
一 清き池の塔
一 大和と系
一 十二月の和名
一 井名の字あり附
一 六十九塔并十年十二月
同領従

八代集女房和哥
古今集 小町

後撰集 素
拾遺集 柿本人麿
金古人き
ふるさと
花の
山吹乃
花

六歌仙

わさもの
家を出
なふうは
仏そ
ありぬ
ゆとうふ
芭蕉の
僧正遍昭

左兵衛督中納言
春やこし
むめ
しの
なるゝ
ひりあらそふ
そでのうへ

指出集 夏 中納言
夏の夜は浦風
ろみうちとけ
ばうなゐ
かたらん

後拾遺集 和泉式部
夏
櫛笥
あけ
ぬぎおく
山郭公
なくこゑ
まち

文屋康秀
吹くるふ秋の
草木乃
志をれ
むべ山風を
あらしと
いふらん

喜撰法師
我庵ハ都
のたつみ
しかそすむ
世をうぢ
山と
人ハ
いふなり

秋の夜
ふけゆくまゝに
物ぞ悲しき
後拾遺集 顕仲女
きりぎりす
なくや霜夜の
さむしろに
衣かたしき
ひとりかも寝む

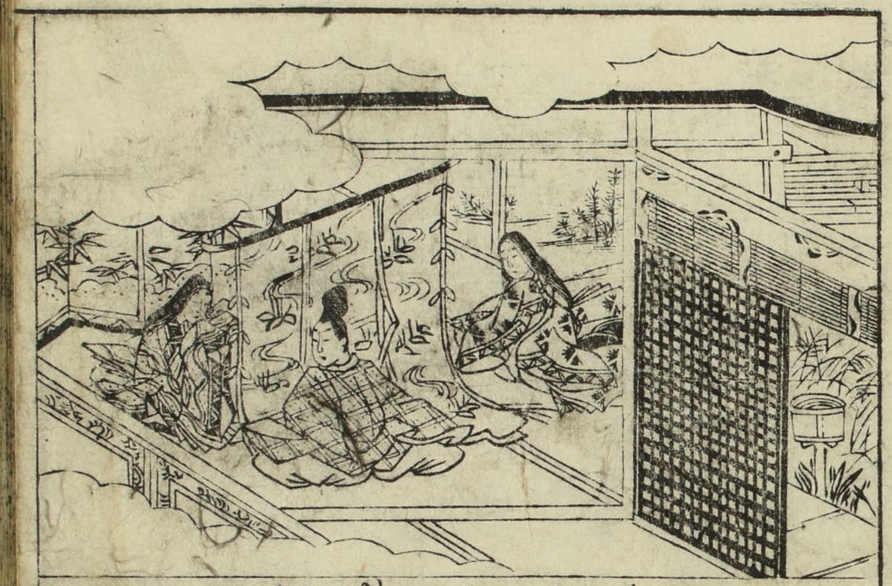
つゆ
ぞ
まき
なく
秋
神垣
禰宜
重
風
秋
風
集

源氏絵歌

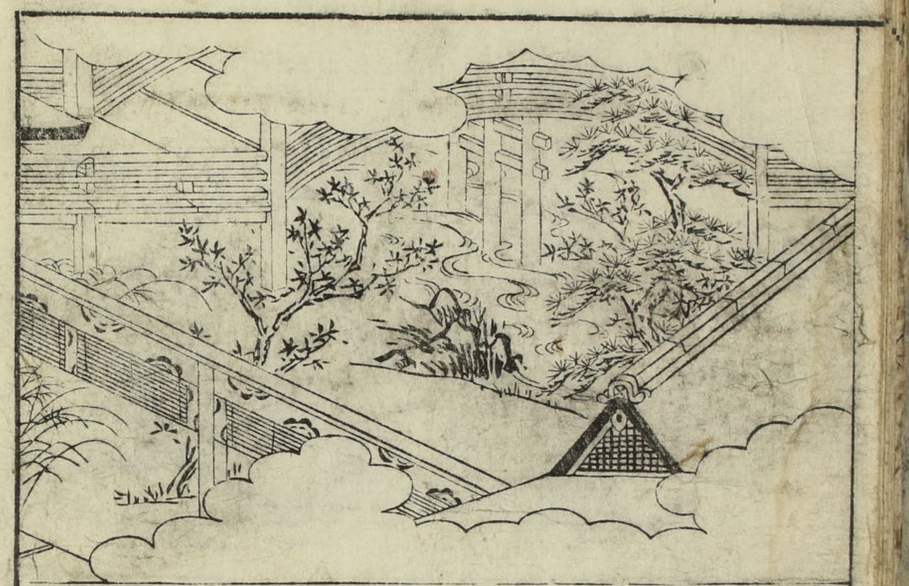
たはぶれにうき名ながらも桐壺の
こゝのへにほふ梅木は面影ぞ
宮なくてうきみの世乃ながれ
さゝらえはさぶらひ
をだにもまゐらぬ
ふりをはわが袖のかこちてや
君と心のあぢきなく
なくさめかねしたもひ
ぬよ両て夕日にうつりてから
となるハ袖の雲ゐの物うき
歎うんぬんつゐひとつ

そのうえいひしらの氣ふを掛の枝ふ
志のゆびてな紙もむしおかしくへ
紀貫里ばこそとこ人めされ
なる波ぢの浦波の音さへあぢ紀
おくきけ枕をそうてそもも紀紙
すかう赤石う月毛の駒むちを
うちまさいこを井かをりてもゑ
志ろうの名を波し易生人を
蓬生ふ俄ふと二は雪をそう
掃もいつね関屋までかう
を給合せあふこもなを
生ふる極のはてのわ風をは

邪ともちゐられば人の契りも
浅氣やでそまぢを仲先
なるもゝきにも情も朝夏の
ひとむこ女ぶかうべとい
ふかひもなほんかれたびうも
なうるなけとも邪ふわ志波
こてふの人うるしゆべて
なるとは愛失れひうそこ
人ひとことなうこのこ
てむすびうそかてのひう
受かさうやなびふ
風となうくこ



いまいくそよ秋の空夕霧
ぬるさほのゝ郭公聞法を
きゝ雲がくれほのぬるの世を
夢のうれしさに行のを
かう涙和尚のいろ〳〵ありがたき
うすくなりゆき姫君ぬ世とゆめ
川のなが〳〵姫乃まつ〳〵
宇治のうら姫乃まつ〳〵
花のあハ雪まがきの雫
もだれのうへ〳〵ぬれまさる
かしこ人法の



ありげれさもゆ絵なるぬ数
だ色おうけそゆゞ
なつ〳〵くのゝ杉のはそそ
ともんまればらそ
やにさゝ梅ノ枝よ心
まろ〳〵ゝ葉のうゝ
ぐ〳〵花のきゝひもうらくる
きゝまれけてつゝわ
がたそそいそらいのゝ
ゝ系ハゝろいつゝ梅の
よ川の風よつゝゝ横ふ
乃ねれそゝ帰すも

○女教訓經

聖典さいごひろめ給ふ。
おいてたくみやすうおれをうらのきをきゝこゝねぢげをがてをのあり。
のかいわれは男ばうきよまふいきよのをつゝおかゞ男をは佛ふ西うあ男をいのちれかゞのなくさみをぬうさよの業をなるひてそれをくうの法やくもれりへいはそれ美れうよう

婦民經章終

○女教訓經

吏女子ハ法ありて門を治め。男ハ陽ありて外につとむるハ天地自然の理なり。陽ハ強なり。法ハ柔なり。男ハ剛なり。女ハ柔なり。陽ハ主なり。法ハ客なり。男ハ外をつとめ。女ハ内をおさむ。これ皆天地の法則なり。されば女ハ柔和にして。貞順を守り。常に男子に従ふべし。百事すべて己が心をもちゐず。舅姑の教訓をよく守りて違ふことなかれ。智恵のさとりふかきも。愚なるまねをして。人我の相なく。貪欲妬忌の心なく。ものごとに慎みふかくして。物をつゝしみ。うやまひ。へりくだりて。おのれを高ぶらず。人をそしらず。ものいふことすくなく。かりそめにも。ものをわらひ。ことばをみだりにせず。女の分をまもりて。ねがはくハ。

ていぐちをひらひのぎむくこそ。注古よう
いまふいうりて。貞女貴女といはるべく
男みなをいとして智恵かしこく亜よきものとも
男女ともを幼時より父母のお
みはいかうるべし。先女子
して嘗姑よくつかへ。夫よきうどうを
父母のおしへいるうもなべうる
当一これのみ従正しかるまうべ。
嫁してより。夫のこころを移。嘗姑のおしへを受つとめふ
こかく日くよん若し。病
して労症などを煩ふ。父母の家へ
寄よかう。恐よ音て。女のたくむべきを学ばをざる

おやまりなり。女おいうりてそ。父母
一起て女の勤ことをむべきの多き
夕の食ものを調へ料理するもの
幸労を思て自分つもべき
給仕とを。これ女事をもうべき
夫のこころを調る衣食なを
のべきもとかりがく。
調へなきわざなり。婦文あわりて
箏を解て寝る事なく。菜を
更ふ室を矢へきめべし。医
なりがし。もうまごをんなこめて
父がごきうりおもまごきん人の

不孝のつみなり。いふとなきまゝ。尚附ハ衣被をかざりてすがたをつくろひ。髪をゆひ。化粧をなし。医者の来るをまつべし。医者ハ世よく多し。いかやうにも。おもふまゝの薬を調へくれんもさりがたし。大切の親夫ますむる薬なきまゝ。是非一ぷくのむべし。扨て医術を用てもろべきなり。一ぷくありてハ男女ともに数をなすべきの紀要なり。夫ハ日くるまをつとめていそがしくますくなく。ましや幼附ハ母の親をおもひ不調ハ有まじきものなれバ。母其ほか名人ともなるべきものゝ幼より友をハなれバこのかくるゝおさなきよりざなるべしと。かく人なれバこのかくるゝおさなきよりざなるべしと。かく人なれバこのかくるゝおさなきよりざなるべしと。かく人な

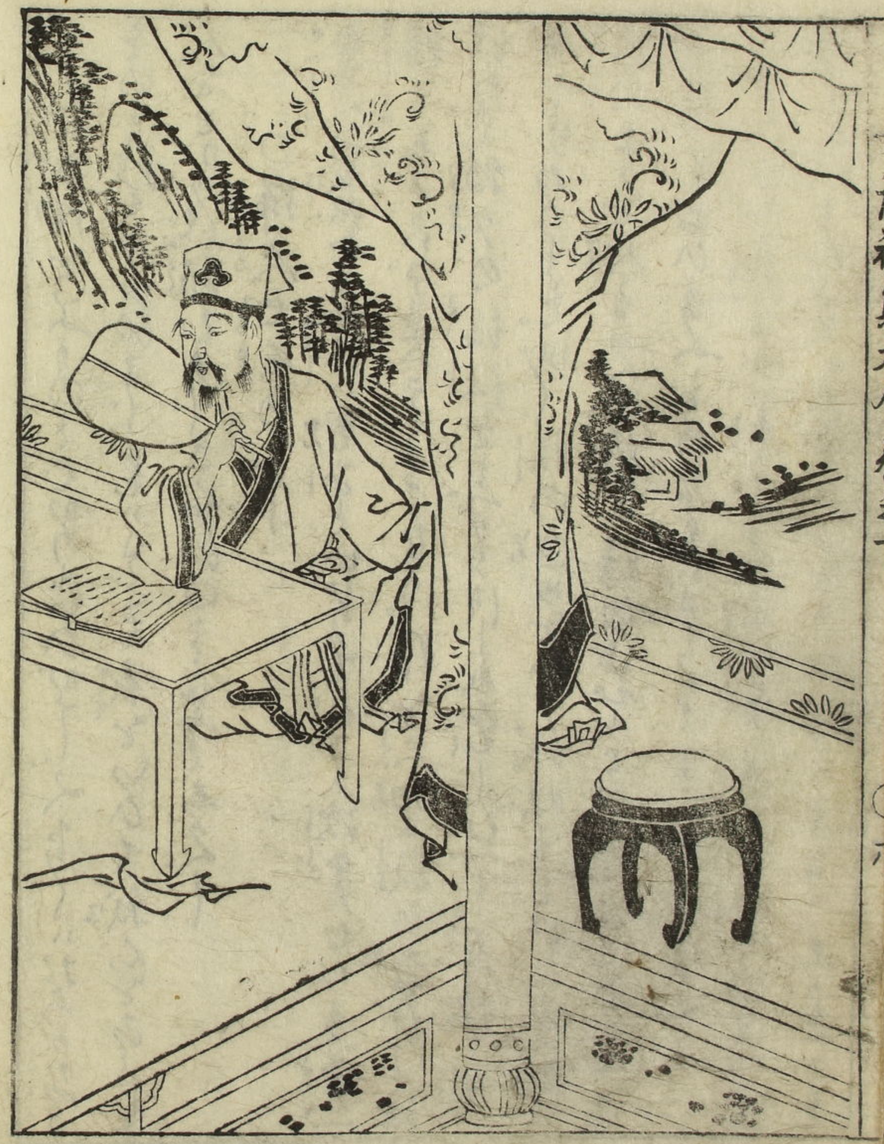
の本しざこいうとしよれ
ば主ばへ奥つきかきまぜる樹は尾張ぐち
驚るしとかく程ようくみるをとりて虫を活め分を活るれ
なくるしく武勢なれ屠のこと繁ふかうしかなく
のごとふをものとも主は恨なろうなるおこ忘れ
につきまいうなと。孫よはしんねるべきふ人をとかめ
ありとてれをかむいはまずくふうをつうなこかく細しと
ものい恵なくとくいうのごとくふ子曽舟中もし蚊蝿はむこ叶ハ
ざるものをもとうとそ云禁いのうく袈裟へうべ。附しくいひ
教へおしまちハ。河をかがちよこむまずきこ。打言をのをあさ
きぐむべし。又我ん子入るとその田もあぜもやうんとふふおさえ
むぐくのべし。武勢な屠れて禁も一禁よハむ泊まずれなう

もんじんハ理をいうのとむかりもいひがし。又ひくいおろうなる
ものとおももんなるまで。是ハこでを表をいひて。我んをおもし
人をとがめむ。恨むまじきんなるのこと禁をきくべし

○婦人七去の事

聖人の教へも女子ハ男子とかりて去る事七つあり。第一
嫁ときらこさる主いさうるとなう。嫁を大切ニ教ひ養ひな
ばうし。朝夕の給仕をうづうこけるあり。第二むづしき病を煩
ふ事あるとも。必く恨のいろめをおさえ。怪しをせんなハ
天乃ばつを指のんや。第三嫁のはしめハ
ふしだらなものなれバさうる事をまずきこと

○第二ハを離さう女いきうるとなう。妻を要るハ。子孫をはらくて
教へ後きんしめん。志を主ハみなき附ハさうるとなう。志を主ハ



実子ありても不孝なるう。又
養子なれども。親孝なれば。他氏より養子をとりてお継ぎなどいふ
ものなれば。是ふかき事のこゝろなるべし
○くはゝ悩さまく。はゝくはゝ悩さまく。
ゆうみ保養第一のべし。養ひくい病ようてもなきこともあり
又求聞の法も。医事よ善くのをえらんで。医師をえらべし
○第三淫乱なる女さうなき。悩むをきく。淫欲をふかうして。身をけがし。夫の名をくづし。父母
私をはづかしめ。ようさめをうせ。家をみだるゝこと。三位基頼の娘妻をみだら
せ玄琴。皆よう女ハこうなきことのなり。男もいろ〳〵ゑ
ろふよは。百人ハ百人なでくれおきて。なかう紅
名をなぶすることのべし。はゝもむきよんを付て。胥ハ好よくべき。

むこハ泥よなるとも。名をやはんごとく人ハ我好む
かふあやまりなりとさるべし。好まざるかさよハこのやまりなきことの
とうり。かりそめ。小奇淫猥を好。ある男を近付世上も淫乱
守て奥うへ人立ある事を好なでするの。名を探し身を
失ふのことひとさるべし。妹よ知
かくいましむべし。むかし唐土家の代よ王十四といふものあり。仕
妻紅を伝じてつよ残茶重
妻倦已といる淫の事をきり汚
久しかりける。かのとぞ妻を倦已と史婦よなるうん事をきくこひて
かよ妻を調へ史よいつよいなふ教へるうぶけるよきをいふといふ
ごとを。亦の人く倦へはて幼りて
奪ひて妻を倦已とな。他亦へめて倦ふる。ある附死る史の亡

なみだぐみ。眼をいからして。泄雲を引つかみ。救解なり
今ここそこひきちぎんとして。幸悦が頬を批きりをバ二人ゟも
熱涙より血を流し。互ひに死しるるそ。かゝるけしからぬ日なきを
まこゝろなき。必〳〵考き女房ぬる事うい浮くいまゝしきり〳〵
○身に悟乳添をいきろなり。悟空妬のんおのゞろ
まそうとがひ悟こあるゞるんみこ
おこゝろ。おでそう〳〵くなをバ。まの
をのこ。庵七元の世ゟ淫南といふ者をる。年ゟ十ゟるとなり
けをバ妻ゟ杜史人斎を納さまく。生再三すゝむをでもゞ〳〵ざり
ゟれば。そつまひそかゟ漢姫をかゝうひ。王氏の女を納て妻そし。我
女のごとく愛し。ゟれバ。此斎をうやまひて。恢合記者ゟも
慶をほしてもつまぐ志る。ゆ年かの斎一人ゟ男をうそける

名を良模といふ。盛もすぐるまもなさがひて。姉母（ははのうへ）をはじめ。次第に家富さくるさま。ことひとつまれ。杜氏（とし）のごとなく。吏（つかさ）を大切にそひ。あれ給（たま）ふを。羨（うらや）むものゝ数（かず）なり。たゞれバかりの栄（さかえ）をうけまじきものを

○弟亜（つぎ）あしき病（やまひ）にかゝりて。医薬（くすし）の術（わざ）ともに。験（しるし）なく。承応（しょうおう）の仲夏（ちゅうか）に。終（つひ）に死（しに）ぬ。嗚呼（あゝ）人（ひと）の命（いのち）ハ。朝露（あさつゆ）のごとく。家智（かち）お接（つぎ）ながき。ことなり。我（われ）ハ疾病（やまひ）のまとひもなく。又神仏（かみほとけ）に祈（いの）る事（こと）の法（のり）しらねバ。病（やまひ）の苦（くるし）ミ。人（ひと）よりハ。軽（かろ）きやうなれど。年月（としつき）を経（へ）。病人（やまひびと）となりて。好（よき）ことゝ。ハ。又（また）。業（わざ）おこたりて。放逸（ほしいまゝ）なり。諸（もろ〳〵）の病（やまひ）ハ。平生（へいぜい）ん無食治（むしょうち）をすべし。医療（くすし）を。ま（ま）て。人（ひと）力（ちから）のおよぶ。ぎりハ。ずいぶん保養（ほよう）すべし。神仏（かみほとけ）を祈（いの）るまふとあさらめ。ゆめ〳〵神仏（かみほとけ）を祈（いの）るものにあらず。

孔子（こうし）病（やまひ）あつき時（とき）。子路（しろ）いのるの事（こと）を。わすれ給（たま）ふ。儒者（じゅしゃ）ハ。平生（へいぜい）ん無食治（むしょうち）をすべし。医療（くすし）の。ま（ま）て。人（ひと）力（ちから）のおよぶ。ぎりハ。ずいぶん保養（ほよう）すべし。それ神（かみ）を。いのる〳〵の実（じつ）ハ。平生（へいぜい）ん無食治（むしょうち）をすべし。医療（くすし）の。ま（ま）て。人（ひと）力（ちから）のおよぶ。ぎりハ。ずいぶん保養（ほよう）すべし。それ神（かみ）を。殺（ころ）ひてかろ〳〵敷（しき）を。ねがふ。ごとし。仏（ほとけ）の浄方（じょうほう）をおろそかにするものなきハ。勿論（もちろん）なり。我（われ）ハ。爆発（ばくはつ）の病（やまひ）を。わすれ。神仏（かみほとけ）を祈（いの）るまじきものを

○世（よ）に多（おほ）く。なきハ。人（ひと）の中（なか）なりとて。そこらの人（ひと）ごとをいふまじ。なり。人（ひと）のよきをいふハ。すくなし。我（われ）ハ。親（したし）き朋友（ともだち）の中（なか）にも。かゝるものハ。かるまじきこと。後（のち）ハ。我（われ）乃（すなハち）禍（わざはひ）となれり。

○第七盥漱あさいまだくしけずり衣服をととのへ父母の前にいでゝあるがうへ食飯をすゝめる事もかさねてそうぜんにてかりそめにもおもてをそむけ又はそうぜんをいひ付我おやまりをかくし人をあざけまた父のまへにてうしろぐらきまねをかまへる是をかまへるといふ況や父母にたいしてをや扨あれば猶よき父母なれどもそうれいをつゝしみ曰ハ一度の無礼もいさめをうけがたし一云いさめをうけハ百云ともおそれつゝしむべしいふハいふものなきハ尚下の人をひきゐる徳あるべきや。されバ父母の命にしたがひ礼義をまもりつゝしみ云ぜひくたゞかりそめにもおそれつゝしむべし。右七云のうち一半はく移りうつるハはく一むざきるべし。幼女のときハ一父嫁してをやとなりぬ。一父嫁してをやとなりぬ。一父嫁してをやとなりぬ。一父嫁して

又こゝを世ゝ治まりて。御代を祝ひそめたるより。こゝにてさまざまくそんじいろ〳〵女中方のよう〳〵をみてくはしくしるす。

髪を結ひけづうして更ゆ。髪の平ゆ階髪ゝを古風なるものゆなり。それ髪ゆ結始ハ神代ゆまゝ。天照大神の時ゆ日女ゆ古風をうしなはざるとぞ。尚時代くだりて婚姻の時階髪をするゆ日女ゆ古風をうしなはざるとぞ。

又かうがいわげといふハけさうをよわげんがためなり。昔ハ男女ともにわげをゆひたりとぞ。それゆゑ人のこゝろ猛く勇ましかりしとぞ。今ハ女のこゝろ弱くなよ〳〵として猛からぬゆゑなり。

○女の眉をそるゆ。

ゆゑハ。一家親戚ゆ死者ある時。いろ〳〵うつくしく結ふ髪を。引ずりてくゆかうはけをとる髪ゝき事ふきなるべし

○女の眉をそるゆ。

ゆゑハ。公家ゆそハまゆをそらふとのまひゆく事ゆ遣るとぞ。

ふまゆハ眉をそることゆ。男ゆまゆを造ることゆ。まゆを造るゆハ神代ゆまゝ。男ゆまゆを左ゟ造り女ゆ右ゟ造りてそ。まゆを造るゆハ名のかゝりゆ眉を生ふる教を刺ゆ力を毛ゆとゆ。髪刺ゆ力ゟ天空悪逆去ゆ業自力を捨て髪を下ろして大空積徳ゆ道ゆ入ゆ力ゟ生ハ。眉を刺ゆ事ゆ。

○歯を染る事ゆ。日本延喜ゆ御宇ゟ始りそこゆハぬそすゆそをうつくしふとぞ又

おもぐろなるものなどくそいへり。
○紅を付る事。唐土の婦人は胭脂にて紅をとる。本朝は紅花をそめて女人の指甲を染とぞ。
紫をそこ合。紅は濃きふうつくしきをあざやかなる風仙花の和名を
紅とぞ。
○白粉は我朝神代天竺より渡る。始て化粧す。和漢ともに美女を
始めぬるもの。ろこーよい美女にて祝儀とぞ。
○頬を紅を付る事。いろもうるはしくなるとぞ。
眉と眼とのあいだくぼくなるをよしとす。
洗けるに。蝉の羽の薄くのごとくなるを
髪なきをのなり。眞を紅粉を付るとぞ。

人ありて。鄧夫人と云る天下第一の美人を愛しける。あるとき
瘡の上を悩亜て水晶のぬ香を塗りるるに。あやまりて夫人の顔
ひりう顔を傷る。此瘡金てもはりられぬ。是を元宝を付て。
頬を紅を付るとなり。今日本の分るなり。是のことをまなびて
一書。まさ玉風にて苦らせ一事あや。ろを白粉だかりあくは
髪すくなきりのく趣を髪を繁更を造り。すがさを粉よそのの
人乃生色をなお亜ひろごくるもの。唐土も和朝とも美人みるる
が。天下第一人ともちくざるもの。つまり
墨を魂女をけるうぞ。是を夫の我をかおして。和朝
とも云ふいうる容貌そこ。ようをりとあひそかな額ひ人るるをい
ひ打言んを痛苦て眉を顰て外石るをかの女さてい夫ろか

むるハ是なりと。急ぎ女のりんを乞ふさくらんぼくさき女のいよ〳〵怪しるふを聖水を以男女是ハいかに清一郎あけまどひけるそ。天性お亜よをぐれいかゞしてみおくさきのかり。風俗取締ハなまじ〳〵ふ由のうつかりぬは。おそよ棘をはらむ化なるべし

○衣服ハ庭神天空れ伴ふ。中ゑ織女已人後りて織機の近を傍へ。今よいうて日くよ盞よ厚くよ貴を増し。下く全も結構な衣装を着ると。沿る伊代のをかさやも思ふるの如女中ハ附くのとりもうさをおこれ言ふまじ。うんを好女の意地仮去の拘ぬりもうハかりをうつしまよぶ体さうなり

とを人のうめかうちれ哭悪ハ天性なれバいふ事を造う駭うごと
力杵よごぬるよ。碗女のけひすぎるバけうさくいふ〳〵さ
をのこごかくちつこかうぬぐをわきまへのごさう杵要なり

〇五節句の事

正月七日　三月三日　五月五日　七月七日　九月九日

右の月日を人日といひて七種の粥を
祝ふ。上古一人より下万民まで。七種の菜を羹として
食ふ事也。七種を採ん八万病を除き邪氣をさらふと
いへり。七種の菜をよめる哥
芹なづなごぎょう仏の座　芹菜田平子ごぎょうまたの名仏の座
すゞなすゞしろこれぞ七種　鼠麹草
三月のうるふ年ごろ大抵かくのごとし又
今民俗なづる一種を入て。粥よ煮て七日を祝ふ。この古実ハ

失ハざるといふ〳〵。禁庭へ奉る八山城国みそろが池の魚よも
百姓のありそ。此七種の菜をうりてなり
三月三日を上巳といふ。曲水宴ともいふ。和漢ともに故実あり。
今茶礼儀を修する。蓬を粉にしてもちひとなす。此日菜をうりて先祖をまつる。又菜を合もれを
百姓をのぐしいう。又女子雛遊をするなり。いにしへ淀の
津〳〵。源氏の君須广の浦みそぎ。三月巳の日祓をするよ
ふなり。源氏物語にくわしく流をもみる。源氏物語にくわしく
くどくいう。是を須广の祓己の日なるひなどいふ。それ雛遊ひ
は祓の具と災を解除なり。此祓ハ洗濯の神乃参詣なり。
洗濯の神ハかの気吹戸命とやて大己貴命（二柱の神）と出んを合をおひ
日本紀神代巻下めなり。別山城玉水條の天神と中を洗濯の神

これ一社の中神之ゆゑ中神と姿基かくまして。父母神のまのをまく八幡のるゝり社をまつるなり。さるよりて雛祭乃式をおくる事と。昔より雛という物ありける。大内雛なんどいふ。今神ずよりもゆる。雛形というものなり。未世よいよいよいよ

さるふるうて。今人民をあいこと。第十九品をとくをいひ
傳へくるい。大なる誤なり。花をの志るる人ならバ。神代の書
こゝろ文よくよくしらくよくよろこび。神代の
名をかく表名と云。山表名を略してひめ名と云。
又雛の文字いろくかきものをいふ。雛乃名
事をかりてするゆへ。なれいとみなさ
ばうりそこのそゞめてするなれさせんとのわざ
五月八日 端午と云。五月八年の月そ。上の字いなれバ
かくのごとし。正月八寅の月。巳午と云ハ午の日と云ふ。酉ハ酉の月。秒の字ハ日と云ふ。又まめの字
句ことをいふ。ちまきを作る事本。屈原忠義の人
なるを以そ。是和漢ともに
ゑまちくて。性ある者がこゝろ。之のごとく習をかざるゆ。早良をも
蒙古を退治しゆへ。よび。こゝろ。是も時代のお遠きて

さめがこゝろ。今日菖蒲を酒へ入て呑バ。湯氣をふせ。あを
廻ることゝう。往古ごを見ハ石菖蒲のことゝ。又菖蒲湯を浴する
事。本草ニハ葉の湯ニ浴することゝ。又公家おゐ菜玉とて紙
をそなへ。五色の糸をとりて俥。陽性よりの事。邪氣
をさけまもるなり。四月ハ陰氣の事。蓼蕎ハ曲茉莉ゝうさゝけ
菜玉ハ紙

下〳〵までも裏のるハ掛当書袋などを懐中しつゐもの
扇雪なでに付ておべし。香をハ卵氣を除き毒氣をさるものと
兒伊達男猴のごとくあらず。異氣の附ざる汗おて多し
しのき奥あるものなれバ。老人のまへなるに汁の臭ひ
なでありてハ礼のうなり。うるべし〳〵おびのべし。
袋ハ功能多きをのなり

掛当の方

丁子 白檀 六ゐ 丹松 各 麝香 五分 詑梶の分
右このうへときざみ袋よへ入袋ハ多〳〵好をよさうべし
家〳〵秘傳の方すくなうらず。今ここに志すハ家傳の方なり
七月七日七夕星合ぞ拵〳〵多き。二星れお逢ふいろ〳〵と
説あり。織女ハ天帝の女なて。天河のほとりにすみ
のこなしのよき事ありて。機杼て勇苦をなし
ふ嫁さをもつ。それより織女機杼のすハらしき事ひさ
しとのき歎をること。嬉歓ふかりき。天帝いろひ
二星を河をへだて。一年に一夜お会べしとせいしのもと。それ説
多〳〵とも。あゝ〳〵志すまいてまゐらべきなり。富云あて
なきさるとをべし。もし説ハ婦人のつとめをなむべきにつぎをすて
嬉乱の分を拾歓楽を貪るをを儆しるのそ。教のはしこと
なるべきるゝ。七夕ハ七おけ苦をうみ。七夜の含るをなくと
いひつくるも。苦うみ含るをするハ。る女のいとなき勤
をとげむべきをおしへうなり。素牛織女といつるハ。天の星
乃名をもべし。天ハ世界れ一人のおもれ而るをの

よいほうに。七夕を祈りそへ田機姫田機などいひて。かく紅人のまゆ書よき女郎七夕踊などさせてうかいよう。書物などもなるべきことにて。今部歸せよ習ひ函せよ家をおこすもなるべきなり

七夕七首和歌

待七夕　後七條門院

まちわびぬ一夜ばかりを為なれど今宵の空ぞ秋風の吹く

七夕雲　洞院上臈

天の川雲のこなたにかくれぬるあひかぢ音ぞ衣手に聞く

七夕雨　冷泉大納言為重

天の川雨こそ空にわたるらめ秋風よりも夜半の声

七夕霧　中院一位通秀

七夕の逢瀬をかすむ天の川はや立ちかくせ秋の霧

七夕夜　海住山大納言為清

七夕のいとなみてゝ秋はよのさり衣いそぐ音ぞ聞ゆる

七夕糸　按察使親長

漕ぐかとて天の川なみ見てぞ知る糸の玉ぬく数ぞ多き

七夕祝詞

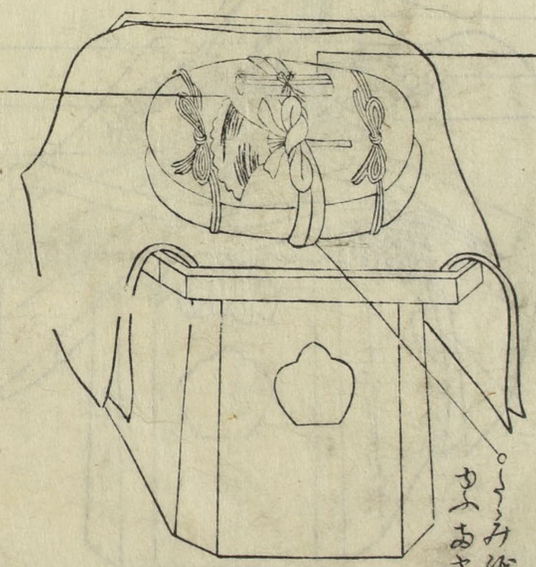
あきかぜのふくをまちえてたなばたのあまのかはらにわれはきにけり

九月九日重陽という。今の菊酒を飲い茱萸を挿して仙人となる。生をうく。

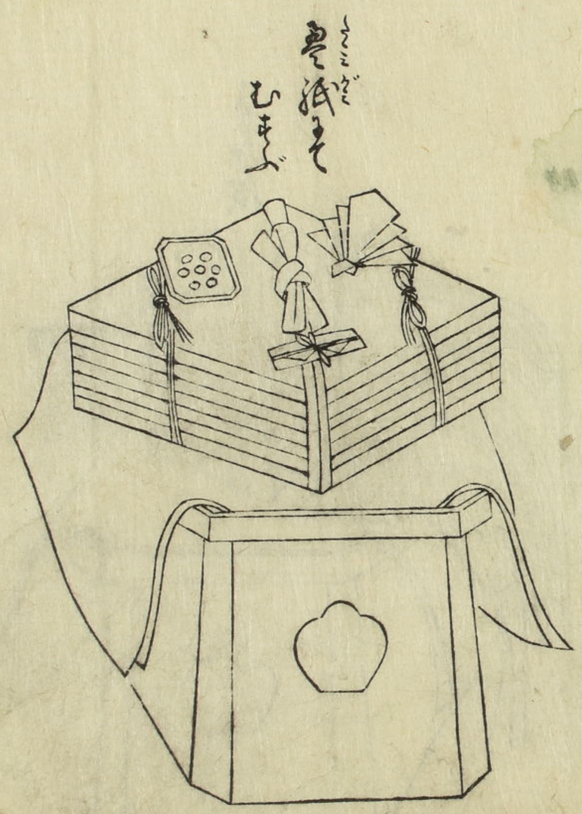
竹を五合という。家門男女ともに男をうなぎ。なをいよいよ出来なり。又正月朔日をえ三ともに三姫ともいう栄のそなめ。月

のち一の日も始なる也よかくいふ
八月朔日を八朔といふいにしへ往あまたゞゝかよれかゞ
秋の田よ実るをよろこび。親戚朋友のかたゝへ物菓子
どをおくる。祝儀をのぶるに憑といふもそれにちなそらるなり
又田面の言白ともいふ。もゝ日ゝ
十月初の亥の日よ候を製るをもちゐるなり。又初ハ神武天皇
なるをもて。又軍家よ
なる始ハ人皇三十三代崇峻天皇の年十月亥日よ豚猪
を献る。こゝをもて亥ハ豚の始りとこゝろ。豚猪をいのこともゝ
又七日うちを喰へハ万病を除と雑書よ約書ゝるゝ
右ゝ如毎月朔日ハ八日ハ亥わき。良を造り。多をか
ざり。心を和らうて。家内を super ある。べし

正月七日

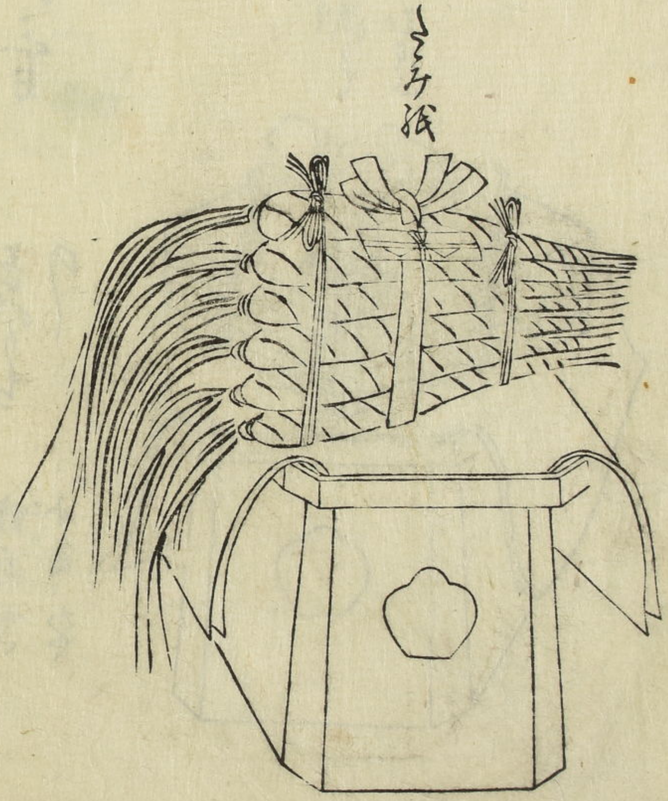


三月三日



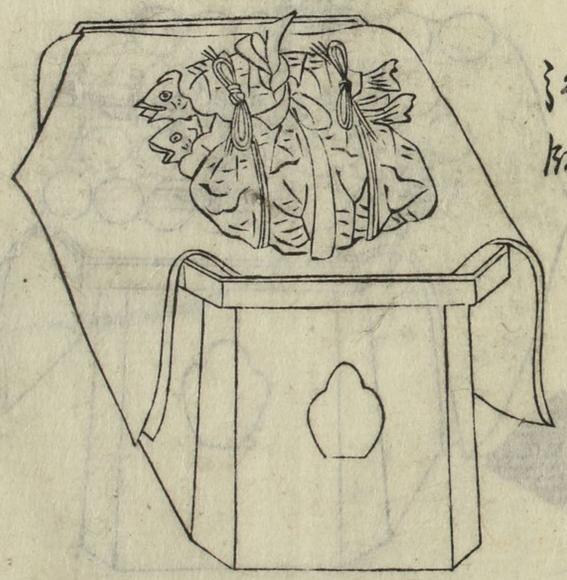
五月之節

ちまき

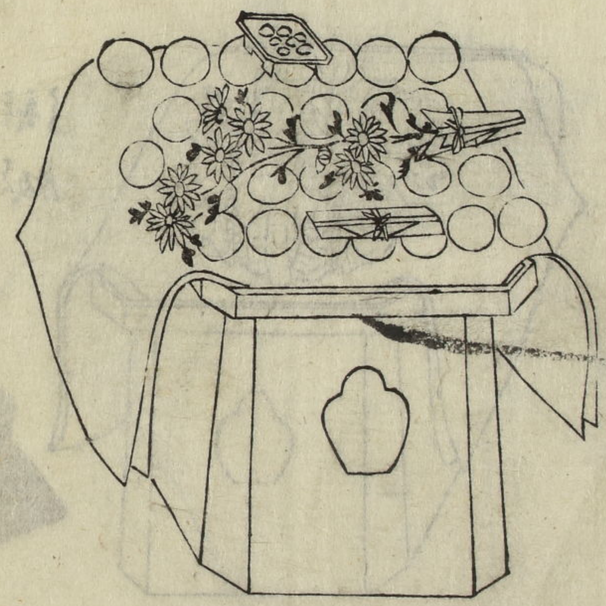


七月七日

さゝ



九月九日



紅葩　菓花

小角こう

右かざりやう、言ふもさらなり。尚季々も。或は菓子どもを用ゐべきなり。猶いそぢまで三方なり。紙一重を三方へ敷き、蓋のすかしのまま上言ふもさらなり。八寸のかざりは梅・栗・梨子・柿・まんぢうをかざるべきなり。云々。枝ものは、いのかしらの柄ありたるを用ゐべきなり。枝ものは、いのかしらの柄ありたるを用ゐべきなり。

我勧めて。要ず始とするは。天照大神の御子。正哉吾勝尊速
日天忍穂耳尊を。聘霊を降し。橿日の宮にて。神功皇后を娶
より。自ら婚礼の式始まりとなり。先婚礼の式々法あるう
ちなり。よくよくそれを考の例。又ハ世の風俗にて。一概に定
がたし。ぜひぜひそれでござる。其家に仕来りの法あるう
ち。多治お無き物約をよく守り。万事好むまじき事。無礼
を正しくする。猶なれ人を。令頼をまる高人を。とかくそ
倹約をまる高人を。とかくそ人々の名誉よりて。後々
道具おとも。あるにまかせて。用色べきなり。ちをとも出物の
有合をばそ。客人の本懐布なり。いざこざを作る。わざま

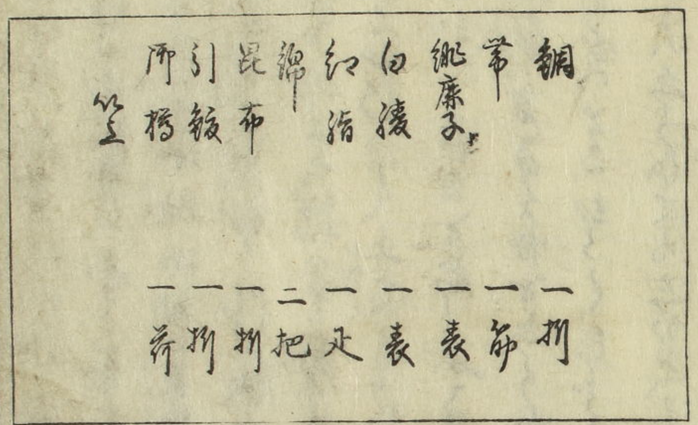
知べきの物あるべし。今ここに考へ得ざるの時方は、別て仮名にてかけひきあるものや

○結納の事

まづ婿と嫁とを引合せて。婚姻を定めたのち。吉日を考へて。男の方より人を

やりて。いわゆる結納と称する物を送るべし。結納とは三荷三棹一荷一棹なり。三荷三棹とは昆布 鰹節 串鮑 塩鯛 熨斗鮑 小鯛一尾 目一つ 熊蝶 白髪 勝栗 寿の字 鶴亀 鋏 包み。一荷は右の品々合せらるべし。一荷一棹とは一反四つ折にして紅白の熨斗紙に包むべし。先方よりは一荷一棹にて。帯一筋 袴地 肩衣 袷 帷子 単物 羽織 襦袢 帯 扇子 足袋 二把 綿 昆布 引敷 掛物 一荷

○結納目録



よろしく結納受取渡し済すの。先板女結礼よ。謝くこくくり

○結納目録認やうの事

結納を常法の如く取かはし。式ハ三献の酒のみ。肴ハ。勝栗。昆布。引鯛。搗栗なり。の一をそゑ初て。扨て。菊の昆布 引鯛 搗栗 の三種ハ。必ず用ゆべし。上古ハ。搗栗を柿と書ゐたり。

○吉日を定めて嫁を迎ふ

結納取かはして。万事の吉日を定めて。嫁を迎ふ。結納ハ。唐のおさんといふ。よめいりハ。昏に。行ふ。古ハ。昏礼といひたり。

○嫁 嫁入の日 門火を焼 舅姑に謁

嫁入の日ハ。門火を焼。先祖の霊を迎ふ。門火ハ。麻がらを焚。

大祭ハ。ゆふべに。門火を焼。

○嫁 舅姑に謁

嫁入の日ハ。舅姑に謁す。

定めまじれるなり。おいそぎ事ハ。さまざまわるき故。むすめの方より。ゆるべし。さて女ハ一たび嫁ぬれば。実家へ。たやすく。ゆきがたし。とて。いとまごひ。よくするぞ。一夜嫁して父母の門火を焼。さて死者を葬るまで。忌ありて。ゆかず。昔より。ゆふべに。門火を焼。祖先の霊を迎ふ。ゆふべに。門火を焼。祖先の霊を送る

今町方ゟ白木棺漆黄土下ヲ塗ル。葬礼の衣服と定
ゝるはあやまりのもとぞ。上下れ一色にて。色ゝ染となりくさ
こゝ〳〵改るこそ。永ろうがましぞかし。古実も武
家〳〵さまざまいぶんぐ〳〵ものこまごま産
火をさくるハ。てんぢくの習ひ。亡者の死骸の害ふをそら
る時。法の神等集りひかゞをそう〳〵。産火ハきてた神
乃れ心をなぐさめ給ふなり。是産火の始しずて
産火をたくる。我ゝ此ろの俗ろんろめこ。永七れたく火をこ
を用一事ぞ。葬礼ゟ門火をたくも。亡者の死骸の害ふをそら
それぞし。上代ハ産火炬なごそ右のゆうをれ。古法よさい
まゝ八而ぞゝる八。門の右よことを〳〵。三十六ぞゝるい九ゟ焼す
こゝろ。南代ハ燭灯ゟ焼て。花ぞゟなろう。四全ふ

てハ炬松ゟ焼。町続ゝる而そハ火のちろんをゟ焼れ産
火をおゝ一焼て。古代の生風をうしなハざるものぞ。松ろを葬礼
のゟ産火ハさくことぶゝ一ハ。ゝ一ハ。ゝ一ハ。ゝ一ハ。ゝ一ハ。
門燎といろ葬礼の時ハ門火といひ。禁産又神ゟ社用ゟは
産火ぞし大極当伝といふ書ゟ曰大極動て陽を生ず。動極て
静ゝて陰生ず。大極とハれをゝくがもなれ。ぞゝんれゟ而
ゝろ。さまゞバ婚姻ゟ始ハれゟもがもなき大極なをゟ。さがいよ狗ゟ
極りて。算入ゟる。是大極動て陽生ずるぞ。男ゟ陽なり
ゟ産婦ゟる事。是陰を生ずるぞ。女ハ陰なりさゟ産
火ハさくるを。大極の陰陽ゟに根となれぶゟて陰本ゟ
陽の俗をゟもり。ゟるをゟ死しる人ハ再び家ゟ帰らぬとふ
ぶゟて。そうをいをゟまゝよび一こゝとなろ。女ハ父母の家ハ

家とをず。夫の家なり。我家と思ふ心をこつゝしみて。よくいとなむべし。我家と思ふ心ありてハ。舅姑に孝心なく。死人の家をすてゝ帰るべし。死人ハ家をすてゝ帰るなり。とかく婚姻を葬送のまで。そは。大なる得や。忘く変るべし。死人の菩提をとふらふハ。後の事

○ 聟入の事

聟入ハ。よろづいとうやうおもなすべし。中花なども。男ハ女よりそゞろにくゝまよはこゝろなく。結納すまして次なり。を次よろづいとうやうなすべし。聟入ハ次よりいとうやうなすべし。世俗先をこゝろえまりて。聟入ハよろづいとうやうなすべし。聟入の式法大概嫁入よりかるべし。法事のちがいをおもひてこゝろえべし

○ 婚姻の意の事

婚姻の私よろづよう意なをれわけ。聟よりさきするいづくの浦までもよく人のこゝろうるべし。後にこの記中もの書れかさはをとゝのうるにハ。人を左よ多ふていのう。女より意なをれ始るなり。雖然の時をうかゞひてこゝろえべし。本善の出よハ。なをてあきらかに。悪より悪き男より始る紙ハとすべしといふ。左一意の私ハ。まうなきなり。我勢のなくハしてハ。深七とハお遠わるゝ。是のこゝに泥まずハ。意ハ何ほどよりも始めようとてさのこゝろをみがゝるやうにこゝろえべし。此意ハ女より始る事。古実を考るに伊弉諾る伊弉冊尊二神。天の浮橋のうへにみめぐりあひ給ひ陰神のたまふ我汝丁美の男過ぬと。を聞則陽神のたまふ吾ハ男なり先ふ

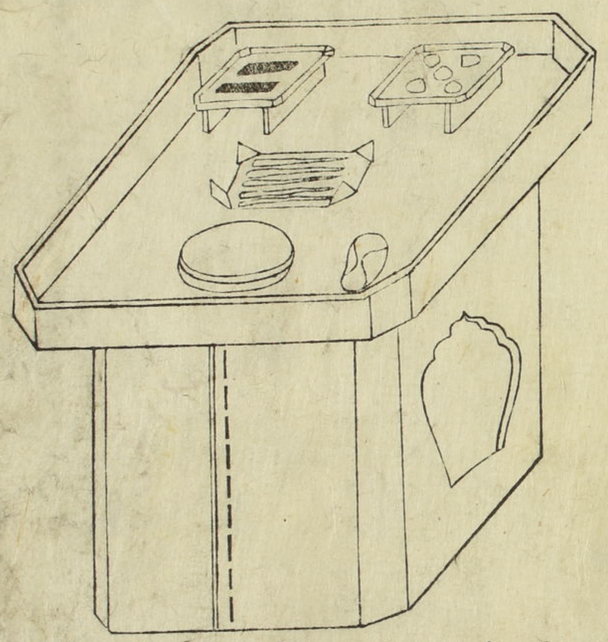
唱ふるさだめなり。婦人より先唱ふる。不祥。夫の改てます可。
とにのり。もろもろ婚姻の事ハ陽和花よりの。法和右より唱ふ約束て。
唱へますを表す。表裁遇可哭女と。法和右ますまず。嘉裁遇
可哭か男と。を附贈答の発端なるをえて交通の術さだまる
事といえども。陽和より唱へますをかさどりのあとえくらかゆるされ
ぬ。陽和より唱へますをかさどりのあとえくらかゆるされ
古実ある事をもつずして。みだりよ我好むかまて所を
地いうを迷はざるようなるべし
○嫁入乃具のすくなきを貧家のひまず。先祖の女法礼集よりくえくらり。

荷物の多かハ。沢お遊ますくすす。荷
おれ事一書よ事ん多さらの。おいく絵だりくす。上下とかざりて
先を一だんよをすべし。古実あるすくよく方まて。
れ事ひといふものおるよう。先ハ婚姻の荷物す。衣服包
新若箭笥。もろかけ荷よ入用のものを入ることなり。当日先
よ入くるらの親里へおくるるなり秘事
○娶嬰清礼波の事
言家のれ婚姻ハよめの嬰礼波をを清礼波一ぬるみよう。嬰
矩施をおりて。こーを波して波二つ玉ちて守結る
ありとて。冊別の人乃おく波して守結る
○婚姻の荷物

嫁のこーをもんまそ・かさまくをくも。そ附剪立あてよ
ふをかくる事。古實くしそそをまつ円よ入なり。
さて結女卯おて。先あーむ内ある。興副の人
後ー。さそ嫁をあんないーて仁物のろへいをヤ座ーこそそ
けまつをを亜ー。ふもんたくろいてんをもめて。先妻ある
なり。先のひ事ハ。剪ハ客舟そ上先よまへー。嫁ハもおそて
下先よ高く。結女卯ハ剪ハ方の先よつき。よあれ方よつがを
そそかいで〳〵女みて。亜こをみすすでれさぐれをなすべー
おて先定まりくる附。そまつ〳〵まかけ製手を事すべー。三方み
朱ふーを。松示そ包そ。のせまそ。元ふ嫁そそをする
なーてみるそ。ま掛ハそまつ〳〵後ー。れ方へまいりてなおる元お
あがろ引後ー。の毒を元上て。男ハそ〳〵むらい立まいりて。嫁の
ま〳〵まくおくし。かいで〳〵亜をれ。酒をうけて嫁よ後も。嫁元を
のみて一献ふ〳〵のむべー。砂人ハ。我九の方へくもちて。下先へ
り。なぐをトよ亜てふ〳〵。扱嫁の方へりて。三交めをしぐし
嫁三交めおふ〳〵のて。亜祝亜よおく附。砂人を亜を剪れ
かくおもりて。剪を亜を剪れて。酒をうけのむ。砂台へ
事。右のぐくまべー。そ亜を一の下へそる附。お盃をおす
ろー式よいうちみそ。鯉のうす身をしくそ。二すまの
うるさにとり。右紐九紐のひきをさして。今紐の事をおて。おす。
（おもりハ略して仕る事ハ二枚めの亜こそ。右のぐく三交ふ〳〵
のそよめるさすく。嫁もおけ〳〵のて。を亜祝一の下へ

附。每ごとを每すべし。先ゝ武の附ハ腸煮そて鯉の身更を細り
目腸を小口切にして。三門よ更亜右組花組の割まさ
味噌まて煮て煮ておきなり每ごとの附ハ海老そ附嫁重ごまいあ共
亜うそ。おのおのくのそいくのを
て細るし。伊まも三更ぶくく砂人ハ志人
きう。かよ志人瓶子よ仮人を
けるあり。女懲の瓶子をれて。碟をあをかけて亜。酒を掛へう
又き人ハ男碟の瓶子をれて。てふをうつむけて女てふのよ更そ。
亜。酒を多掛ようまそし。さて瓶子ハりとそおぞくく碟をさし
て。本のさなをしおくさし。略芥の附ハてうしひさけを用ひす錫一
敗ふ女てふおてふ弁多るなり
敗ふ人くの事亜ひ方ハ書るふくくり

組附の図

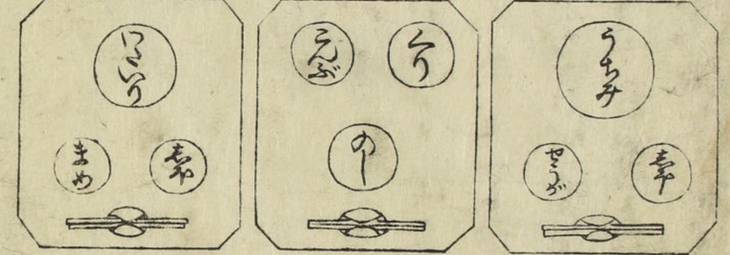


かるうけ二枚右の方ハ
もくこうけ
右のむうまふ角ごんぶ
二ツ花のむかまふ角ふ
栗ふ中みかくれ
武三枚のうに汁しハ
ごうもむこと帆と
亜の表ハ前よりす

式三献引渡之図

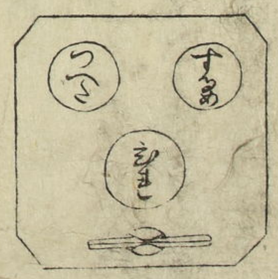
右

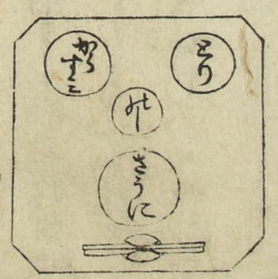
二　一　三　九



略して引渡しともいふはのしめ等をおすゝめなり

雑煮之図





雑煮のもち大根いもくわいこんぶ

細の儀別の式を略煮にていたすなり

式三献の内へ引渡の汁を出す。式法ある事なり略して引渡ハ二汁五菜なども今は略式をおこなふ。引渡ハ献数の古実をよく心得たる人故実を聞べし。献数ハ一献ハ三度ニ献ハ五度三献ハ七度なり。右ハ式三献の本

○雑煮引渡の本

男重をのこれさあり。引渡ざうにをいだすなり。ざうにの膳ハ飯汁引渡の膳ハ飯汁なり。雑煮ハひだりて雑煮の膳をおすゑ。酒をもおすゑ

お祝の女法礼集よ式三献の事あり

ん〳〵の恵うろ〳〵。此席
○恵一しずく
女の小袖初八白猫なり。ほ
いろ〳〵ろ小袖と云〳〵ろし
乃小袖。男姓より寿ぞのし
ぶほし。むこを小袖ぶて
の君ごも。皆〳〵ろ〳〵の
死う〳〵。ひざ〳〵で武こ
ぶ〳〵ふ〳〵ろ。婚姻の法わ
みをよごし〳〵。そ〳〵の祝
あ〳〵ば。りさえん坊
敢〳〵ろ〳〵を勧ろし。そ

事也。るゐ人。老ふをいたはることを。
さとすべし。万民よりうやまはるゝを。父母
祝言をなんどして。ねんごろにもてなすべきや。
もし女を生まば。男を弱よく育べきや。
いとけなんや。婚姻のたぐひ。夫婦の中むつまじきのこと

○婚礼の時ちごどもを。みてかさねて　たくる　さる　をとる
いはひ　ものども　いよ〳〵　みがきて　ゆかしく
又むこさた　酒　うのめどり　ことに紋　みどの衣服をかざる
をいむべし
又男ふたりのかさ　衣　をいむべし〳〵　かんこそでぢ
祝儀ぶり　など

○日ごろ　ものゝさま
吉日を撰ぶに暦を以て定むべし〳〵　こゝまでの中脱下脱たる一丁ほど
生れぞれの名好遠ざかるべし。前より
仕ふる事も。終をどゝもにするてかくる時ごとに
う　活潑の人ようて日よりず。さえ幼おとなしく
乃師よ仕ふるを入学よう。天敬日などの吉日を
うるよれ。名誉ありて入学よう。学さ
も。日よりをいむべし。終をどゝもに日日時よ入学させうる
生徒　懈怠ありて懈怠がちなる時ごとに
らぬをあり。もめてうるう紀をあるがち日を
ぬ。たとへ天敬日ありとも。人のこの
ぬをみうらば。そのぬを
ことそいふ。不成就日なりとて人の

為雛をすゑひてそのの人よろぶまでさゝやすべてかゝるのすみかさう。大事なはそんぢやうなどしてかろうれいさう為べし

○天赦日のすゝ

春ハ　戊寅の日　　夏ハ　甲午の日

秋ハ　戊申の日　　冬ハ　甲子の日

○不成就日のすゝ

毎月廿日　十八日　廿四日　そうれ附よろづの附まて悪し

八日　十音　廿二日　廿九日　みの附より亜の附まて悪し

右ゝ日ハ凡人合のゝめることにあらずものし

○男女お性のすゝ

世よあま祢く去うるすまて。大雑ゑ。三世相なとゝ書よ

うんぐうろう。乞も祝よ。このごろうざう半ゝそいおりれた。ぎうそを生を色をかゝゝみでず生ハ。志るてもも味ありがゝ。又生れ年ハ。年に納生ゝれを生生月日附のちがいまで。そ人の一生大よ違ふ事なまバ。雑ゑ三世相なとゝまでそ。ゑうよゝなるいさかのすれ違ひまで。ばとある半一世よ多ゝ。大吉のお性まで。ゑんをくゝるそ。を女の。夫をまいでゝろよし。或ハその起令祝のお条を信ずよう。元億をはゝゝ北。永内の治りあしく。奴婢までもそごちがゝくハ。そ家ゝみさゝくみ源氏昌多べきや。えまのゝあゝ。ろでゝきゑをお女を。お性よろしゝそそを信ぬんして。をむでゝきをあゝず。山祀をよくゝ無く。多ゝるお直のゑん。なゝバ宝ゝむる半。約束の極主とゝ。ハ男女

ここら荒蝙蝠惣情といふもの。三世のまどうそのもの

○此厨子悪相かざりもの

ゑづし。ふぐのかざりもの

ありてそのかざり一ゆう

そそをのうしきやうにかざる事。起て我おひ覚へ

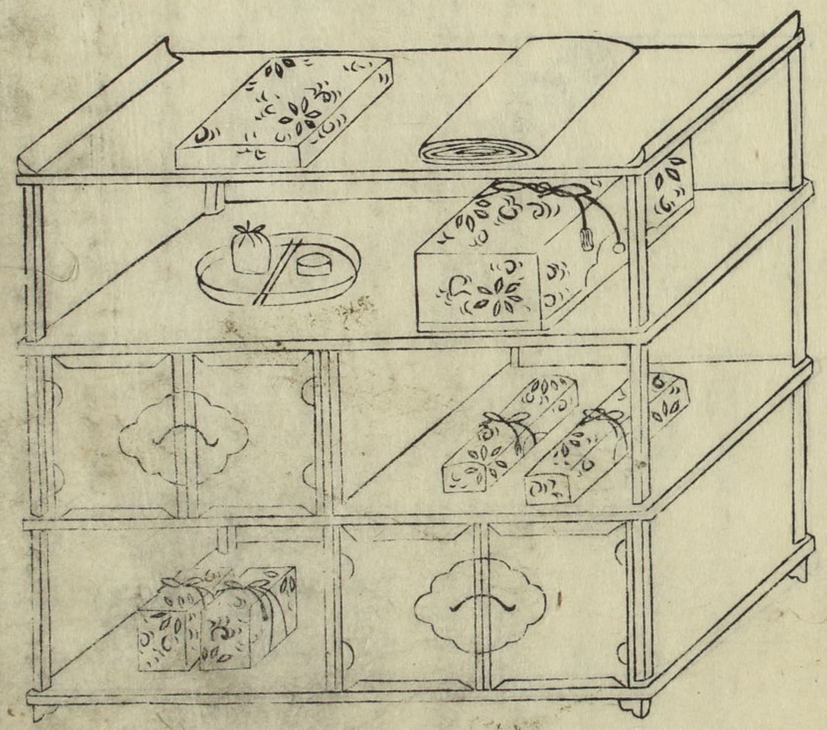
一本ふかる事になるとそみぐろにそ一てなんずるがごだ

蝶花かごの折もう。百蝶そ。百様の形あるべ万もの

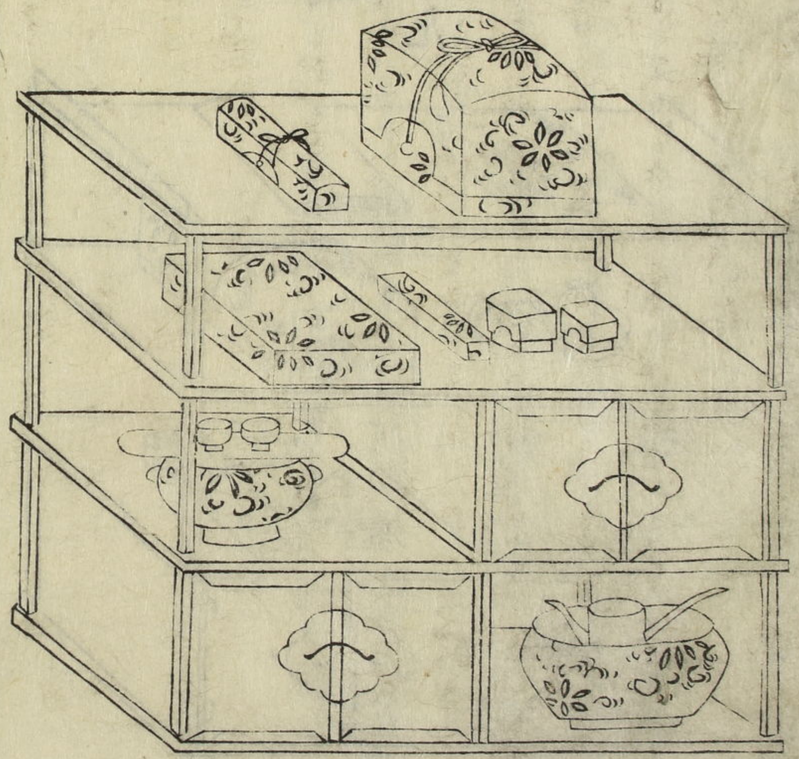
吾ひう。我をはとめて。他を離ずる事ある時ごさうも

御厨子飾之圖

床之上



黒棚飾棚之圖 右之



○四季衣裳の沙汰

四月朔日を更衣といふ。六月晦日まで。袷を着。八日より帷子を着る。

まさ四月朔日より七日まで。袷を着。八日より帷子を着るといへども。帷子は六月晦日より着るなり。併し男子は此限にあらず。女子は生絹紗の。裏有る生絹紗よりかさびうすき。六月朔日より七月中旬までを着るなり。八月朔日より又綿入を着る事なし。九月朔日より三月晦日まで綿入を着る事なし。帷子は八月晦日まで着るなり。八月朔日より九月晦日まで袷を着る事なし。九月朔日より三月晦日まで綿入を着る事なし。帷子は八月晦日まで着るなり。大法なり。

禁裡にて衣更の事相定といふ書あるよし

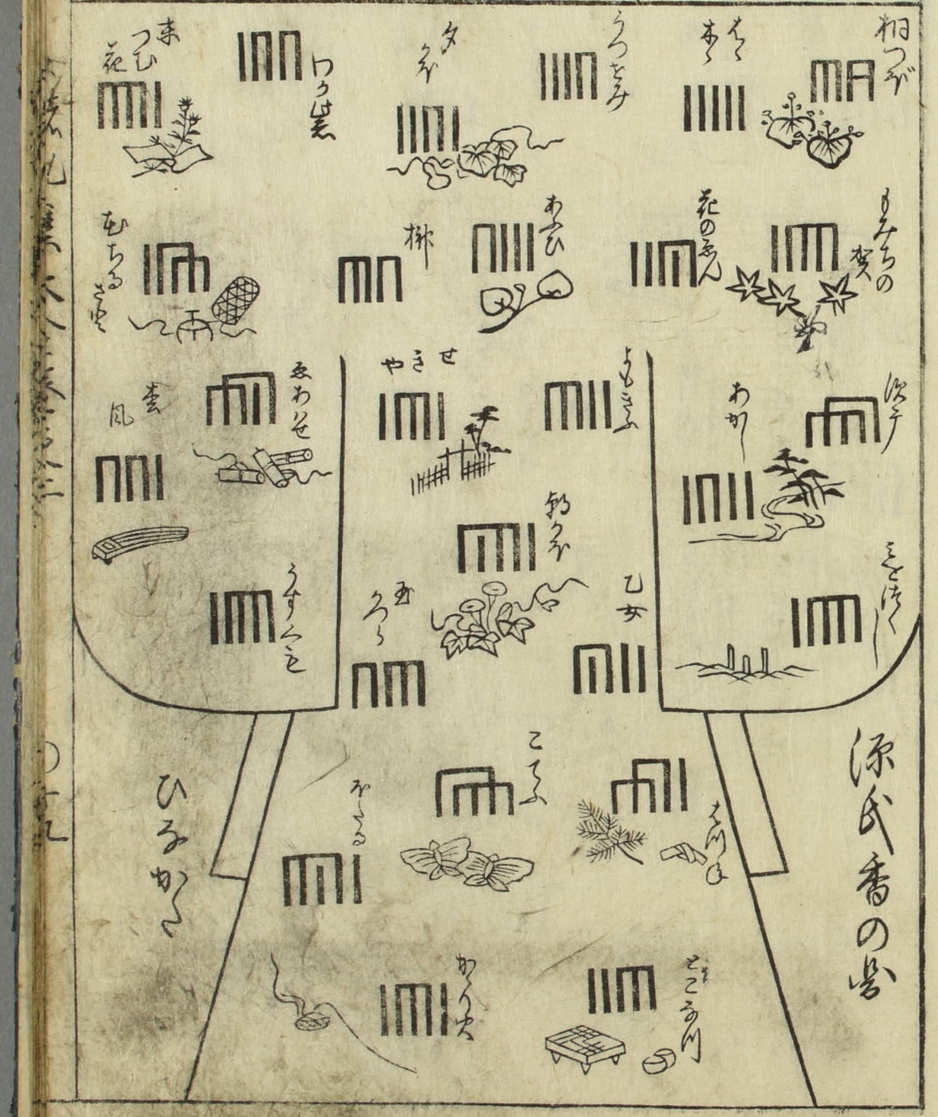
○衣桁かざりは

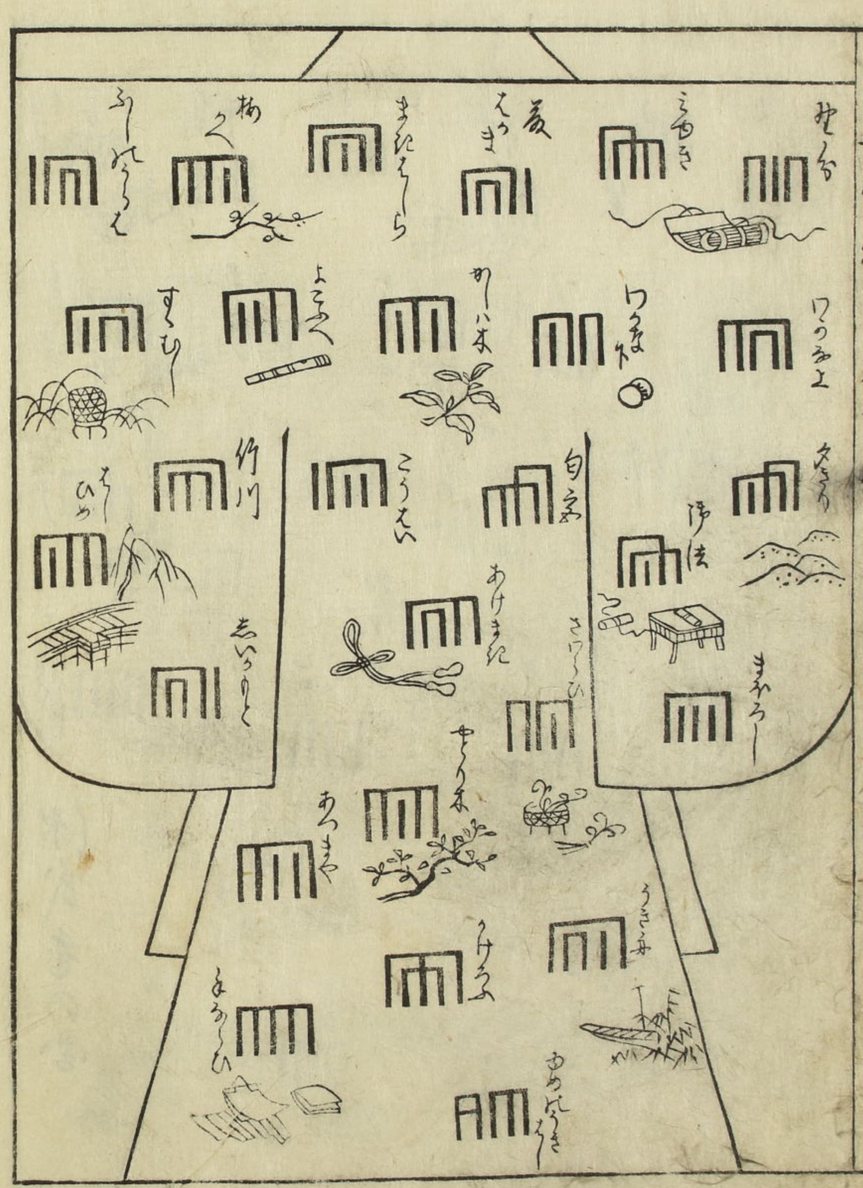
衣桁は小袖かざる本。女の着るものゝ上ざいと云なるや

うみて初るの小袖は紅よりかさねるなり。男のかそへ年さがいとうくよるる事のうにかぎりれのうへ袖ぐみうしてゐざさ由よりうちけめりなくべくちょなび武事かくるもの袖ぐみを本よりうちょりうて。うくよこりうへにかさる本小袖をもぢりぢ巳季迎じて。そ附節のの小袖をもぢりぢにうけるなり四月八ぐる名。二月八蔵美。三月桃名。巳月名。文月高柿。六月尚令。七月白。八月和粉。九月黒和粉十月茶。十一月んがう。十二月紫。雲八青名。黄八赤名。赤八赤名。朱八白名。名八黒名。右用八黄名なり。りゆうも巳季のうり迎じて年べきなり

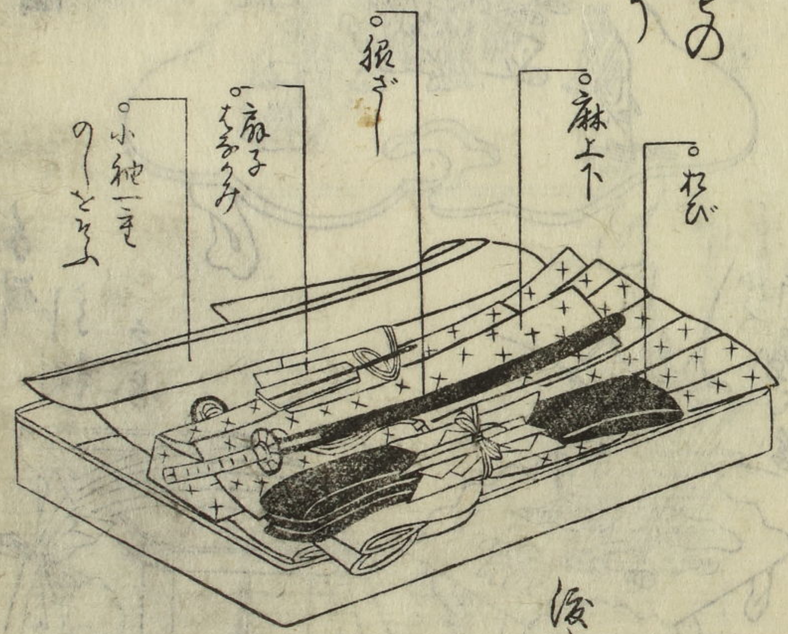
衣桁架之圖

同二 版解圖



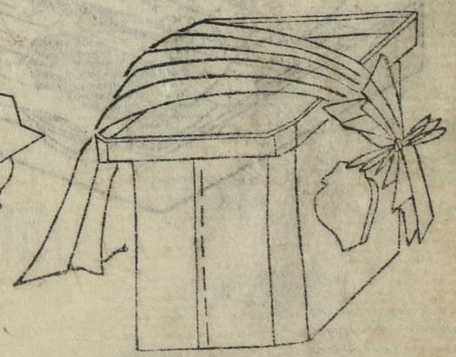


聟入ときの小袖つゝみの図



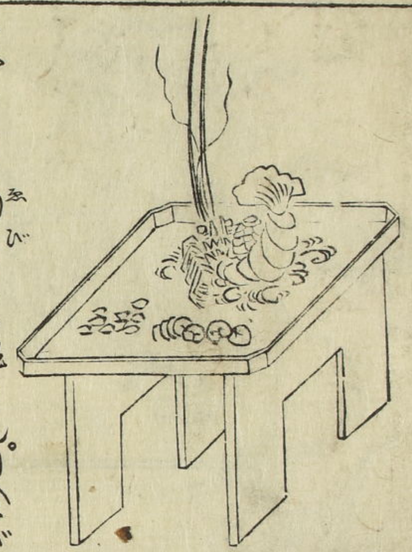
鴛鴦之図

手掛引敷之図



左右置之図

松魚之巻



まないたに俎をすえ。包丁をもち。肉の方ところを割てりも。松葉をもちゐ。ひだりを男。或ハ氷塩又ハこんぶ等を用也。おさへ物をもちゐ。おさへ物ハ鰹節のうへ。或ハ重石等をおく。重石ハ食後の茶を用也。おさへ物ハ鰹節のうへ。或ハ重石等をおく。重石ハ食後の茶を用也。おさへ物ハ鰹節のうへ。或ハ重石等をおく。

松魚之巻

まないたに俎をすえ。包丁をもち。肉の方ところを割てりも。松葉をもちゐ。ひだりを男。或ハ氷塩又ハこんぶ等を用也。おさへ物をもちゐ。おさへ物ハ鰹節のうへ。或ハ重石等をおく。重石ハ食後の茶を用也。おさへ物ハ鰹節のうへ。或ハ重石等をおく。重石ハ食後の茶を用也。おさへ物ハ鰹節のうへ。或ハ重石等をおく。

婚礼之巻拾壱

歯を染る事

そも〳〵女の歯を染るハ。我朝の風俗にて。老若ともにかぎらず。そも〳〵なすびの方より。おほ歯を染る。始ハ一家親族又ハ友のうちより。おほ歯を染ざる者ハ。人のかずにハ入ず。其日の祝ひとして。鉄漿ハ。上流の家ハ。おすて。筆おろしのやうなものをたてる人〳〵。女の方よりも。祝儀をとらする。或ハ招待。或ハ振舞等。酒肴などを

まる手一谷限まうして宝うる法のー。おそら白ゐる
鉄銀と。株数七朱をそりうひ一方へ。酒肴をそろる
いっまるゆくをうるぴ。ひ鉄銀をりうひ一方へ。酒肴をそろる
まく。扨かるれりて。式こくまうすみこー。雑煮な猫を
等うの。くくのる限おる趣よる屋ー

○結納ひ納め衣裳振着うる

婚礼そのひて。翁より結納を参ひ。嫁の方よりそを
受てうのをひろめそて。一門ち近き朋友をまひを。賜盃を
酒へりそまするし。又ひ宝ぎ紙て。名雲振出とる肴
て。兄まく親朋友を集め。る限お趣よ酒肴をそろの
うまうふる。嫁の元お調友を。庭迄おかざり見守るあり。
つの女房ち私もくとそ立より。ぞくくしきれあ

らくのようをあいさつーて。又かくふ紙合し。何ー。いうござうをのうみぐ。さきまうみぐいうき
女中のより合も。おぎくしくけうある本るべー

○初座又四の本

婚礼お調吉日を宝め。嫁のこーいうて。宝紙幼屋より紀
里へ使婦のさげんよく。家内揃よまぎくしき招る式
いわくる本。かいぐへ女房の役ともべー。今日より宵
迄うまで。よめの親おの方ようぴ。使婦のきげんをくぐ
菓子抓招をり無おぐ。さまくの善法くしー要本
て。花をかざり返り把の数をつくるる。先を訪やる見四こ
ひり。そ役のうの〳〵全紙出を等る。翁のかく
より出す。又紙屋ようとそ。別ふ送るもまうる全紙を

古歌のおもく。藥苅よう里の古ろの秋めるをいかに附句とおきかへ

○三ケ日の振袖のう

三ケ日の祝儀とて。着の方より親女中をまねきて。なすゝめ心。私酒さかなをそなへ。琴三味線などおそろをはじめ。幼女ハかさりて。見わかひ。舌かるき双六などのあそびをもすゝめよ。長の婦くるをもてなすべし。あるひきよ鞠乃ごとまねごろつきれ。この時嫁の指糸そ。小袖衣裳。そのかわ綱交ごとなど。在家せまこかざるまし。いろいろのみだしもの今日むこのかるよう。膳を揃て男のかくへおくれをうつ。ごとを世ごみ百八十七まが

ごとくなり膳の外月三石三斗三合そ数を百八十七まるし。形を胡桃をうけ。白と赤と二ごとすべし。赤ハ小豆の黄汁をそ色を付白二百九十三赤二百九十四男よりかさねを。釈迦肌友おくへの長ごとくなり

○五日帰ごもあ

婚礼の翌日にある日。ふるまう嫁釈迦へ行るし。翌日むこの方より釈迦おくる。里へ人を遣。案内なり。里又四ごいなり。ほ一揃のそうその。袴足袋おくるまうみて。一門はのあるを。案内者など。おくハかくそうを着袋をうけ。をいくして。膝ごまを賞翫うを

○婚礼ひ始めの

婚礼その風俗おのおの異いとよろおびとて。朋友のよ
あるひは知人へ赴くのそなへ。万菓をこちへ
酒肴菜ふをそれぞれひくのおそうの。数を尽くし。元
裳を湯て庭を潔酒肴珍菜いと山をなし。椀本よ
らく。堆き盤菓。は附とこんくらう。膳の方おひろめ
と名付。布施を調へ新き人をもてなし。お入のだて
かまでもすみ〳〵隅くをよくをうつくしく。曲礼曰為酒食
の方より招来を。鉢をうけ。又菓子抔をそ
ゐる事。名を盃ごと。
○花嫁のよそ
嫁聟星を有逗留ありてそれぞれ

は附もあまたそ。よ〳〵調へ。
のうち盃ごとすべきものなり。ふたり人〳〵
○膳椀の事
婚礼式〳〵おすみて後。聟を方へ膳をまねきうけ
まる。先をひざをそろとうち。あるじ一門親戚おこんじて
膳をむつまじく据うけそ。組ごの事。礼酒の吸物
礼者みな。庖丁人は切目を。
座をはなれ座肩を汚をふき。あんだいなどの名高よ
きのままで。一ちがくりをいて。ちまち化粧の
ものをかへて。強ひ盃。おりひ
本。拵ゑかんのよし人あれば。謡ひ方よろ所望し。或は
をそれのうちあそび。おりふし芸をつくさせて。花つと

ぶようちろろぎ。式(しき)〳〵のうち別盃(べつさかづき)のきうくわんさ
ん〳〵引(ひき)くてわ。ひざまづくべし。ぶれいあれども
いりもとゞめだ。まゐまひ並乃ふむ西をもたゝず鳴(なり)物(もの)
かめそ。ひざおてにぎて。ぬぐ。ひざを擦(さす)をとゝのゑ

○婚礼の夜(よる)当座(とうざ)のこと

婚礼の夜。式(しき)〳〵の事(こと)すまして。雑煮(ぞうに)くらい。本膳(ほんぜん)を寝
女房(にょうぼう)どちへ。猪口(ちょこ)を一ぱいにな。嫁(よめ)だかり蒙着(もうぎ)の被衣(かつぎ)を
取(とり)て肴(さかな)を其(その)前(まえ)へ置(おき)〳〵りよるまし。いぐ〳〵の女(おんな)ども
皆一かさ〳〵つけて。嫁(よめ)をすゝむる。お猪口(ちょこ)もさがりて。そこら迄
の肴(さかな)をあやかるんなどいひて。わをもく〳〵と立(たち)かゝり。ひつぱり
うごひこへ引(ひき)よせ。立(たち)さうぐるいろ〳〵もいたしくるしうもあら
ずさ。ふぐうをもたいやを本〳〵や

女諸礼集大全巻之二 婚礼之条終